

親と子の深いつながり

丸山敏秋*

The profound parent-child bonding

隠れた通路と空気の教育

右手を左胸に当ててみれば、心臓の鼓動がはつきり伝わってきます。この事実をふだん「不思議だ」とは思わないでしょう。「あたりまえ」だと疑いもしません。でもよく考えれば、少しも「あたりまえ」ではない。世の中は不思議に満ちあふれているのに、あまり意識しないのが不思議です。

ヨガの行者には、何時間も心臓の鼓動を止められる人や、何十日も飲まず食わずで生きられる人もいます。かつて筆者がヨガを習ったときのインド人教師がテレビ番組に出て、裸の体の上を10トントラックで轆かせて平気でした。普通ならば内臓破裂でしょう。科学はそうした不思議にどう答えるのでしょうか。

心臓の鼓動を止めてもしばらく生きられるのが不思議なら、心臓が規則正しく動いている事実も非常に不思議です。子供の体が日々大きくなり、なんでも模倣しながら成長していくのも、まことに不思議ではありませんか。

「あたりまえ」の日常に満ちている不思議を感じられる人は、知力が不足しているのではなく、逆に旺盛なのだと思います。そして頭が柔らかく、感性が鋭い。そうした人たちならば、人間関係におけるさまざまな「隠れた通路」に気づくでしょう。

とくに親と子は「隠れた通路」でも交流し、それを介して強く結びついています。ところがこれ

までの教育で、そうした通路の重要性はあまり積極的に論じられませんでした。下手をすると、非科学的とかオカルト的だと言われかねませんから。

教育は、目に見える形をとって、知識や技術や生活習慣を身につけさせるだけではありません。見えない「隠れた通路」を介した教育もきわめて大事です。感化、そしてとくに薫化の教育がそれです。

英文学者でエッセイストの外山滋比古氏が『空気の教育』で述べておられたことから、薫化の重要性を考えさせられます。現代の日本人はハウスとホームとを混同している、と外山氏は言います。人間が生活しているところには、やがて一定の空気・雰囲気ができる。ハウスの中にこの空気が生まれたときに、そこがホームになるのです。

ただし空気は一朝一夕にはできません。建物のハウスができたから、もう安心してマイホームが実現したと思うのは早すぎます。子供が一人前に育つための目に見えない心の糧は、ハウスでは与えられません。核家族の大人たちは、そのことを忘れてしまったのではないのでしょうか。

たとえば、しつけを厳しくするのはよいとしても、口先だけのしつけには限界があります。親の目の届かない所では、何をやっているかわかったものではありません。

空気による教育なら、そういうことがない。なぜなら、寝ても覚めても、空気は子供を包んでいるからです。子供だけでなく、大人たちをも取り巻いている。だから、めったなことではできません。

外山氏は「こういう目に見えない影響力による

* 一般社団法人倫理研究所理事長

のが教育の本道」と言っておられますが、同感です。技術的な教育では変わらない子供も、空気による薫化の教育によって心の奥底から変わることが少なくありません。戦後の教育は、そのことを忘れていないのでしょうか。

では、子供の心を育てる家庭の空気は、どのようにしたら醸成できるのでしょうか。

外山氏は「形式×くりかえし×時間」と説きました。なるほど、そうです。たとえば食事のときに「いただきます」と言う形式が繰り返しつづけば、もう黙って食事をすることができなくなるでしょう。すでに空気ができているからです。空気が「いただきます」を命じるのです。

空気を察する日本人

「和」を重んじる日本人は「空気」に支配される民族だとも言われてきました。場の空気が読めなければ、「察しが悪い」と非難されます。たとえば職人の間ではこんな会話が。

「親方、アレどうします？」

「おう、ナニな。ちょっとナニしといてくれ」

こんなやりとりが通用しなければ、職人の世界では一人前になれません。そうした論理的ではない行動規範は、文化的な後進性の表れだと批判されてきましたが、果たしてそうでしょうか。

論理的判断や個人の主張を重んじる欧米社会でも、場の「空気」を読み取って行動するのは当然です。暗黙のルールはどの共同体にもあります。日本人の社会では、場の空気とか察し合いを尊重する度合いが相当に高いのです。

「われわれは常に、論理的判断の基準と、空気の判断の基準という、一種のダブルスタンダードのもとに生きている」

そう言ったのは山本七平氏でした。名著『「空気」の研究』にそうあります。山本氏は日本人特有の「空気」を形成している要因に、アニミズムを挙げました。八百万の神を祀る神道のように、万物万象にはアニマ（靈魂とか生命原理）が宿っているという考え方です。アニマの意味は「空気」

に近い。だからアニミズムとは「空気主義」だと山本氏は言うのです。

ともかく、日本人は論理を介さずに、雰囲気であってしまおうという能力が高い。それは事実です。だから「空気」に支配され、「空気」が意思決定してしまうという問題が出てくるのもわかります。

しかしながら、「空気」を察する感性が、人間関係の機微を生みだしました。アニマ的な「見えない存在」に対する感受性が、自然と共生する精神を醸成しました。それは本当に素晴らしいことだと思うのです。

人間関係の隠れた次元

皆が「あたりまえ」と思っている日常的な行為に、「隠れた次元 (hidden dimension)」があることを最初に言い出したのは、文化人類学者のエドワード・ホールでした。

当の行為者も意識せず、その行為によってコミュニケーションしている人たちの間でも意識に上らないような次元がある。そうホールは指摘したのです。たとえば、パーソナルスペース(個人空間)がそうです。

誰かとコミュニケーションするとき、相手との間に距離を取ります。その取り方が、実に微妙なコミュニケーションの道具の一つになっていませんか。相手に対する好感や反感によって、距離の取り方が違うでしょう。それをホールは至近距離、個人距離、社会的距離、公衆距離の四つに分類しました。

たとえばこうした距離の取り方を、われわれは文化の中で学び、知らず知らずのうちに身につけています。子供でも5、6歳になると、無意識に距離差を示すようになります。そのように、人と人との間にある物理的空間がその関係性にどんな意味をなし、どんな役割を果たしているのかを考える学問を、ホールはプロクセミックス (proxemics 直訳すると近接学でしょうか) と命名しました。

ホールの「隠れた次元」とは、言葉にならない行為の次元ともいえるでしょう。教育はコミュニケーションで成り立つのですから、「隠れた次元」に注意を向ける必要があります。

文化人類学や社会学など多様な領域で異彩を放ったグレゴリー・ベイトソンは、ダブルバインド（二重拘束）という「隠れた次元」を指摘しました。言語的なメッセージと非言語的なメッセージの両方が矛盾して同時に発せられ、どちらに従って行動しても相手を満足させられないような状況のことです。

たとえば、親が子供に「こっちにおいで」と言葉で指示しました。近寄ってきた子供が親からドンと突き飛ばされたとしましょう。そのような対応が繰り返されると、子供は疑心暗鬼になり、どうしてよいかわからなくなります。

親から「おいで」と呼ばれても行かなければ、怒られるでしょう。でも、近寄ると突き飛ばされてしまう。子供が混乱するのは無理ありません。「自由にやりなさい」と親が言っておきながら、子供がなにかすると怖い目で呪むような場合もそうです。

家庭内でそうした経験を多くすると、外も同じ世界だと思いきみ、誰に対してもどう接してよいか分からなくなり、引きこもってしまうかもしれません。これでは家庭に安らぎの空気はつくれず、親子の間の「隠れた通路」もピタリと閉ざされてしまうでしょう。

人は期待された通りに成果を出す

教育心理学の教科書によく「ピグマリオン効果」という現象が紹介されています。人間は期待された通りに成果を出す傾向があるという現象で、1960年代にロバート・ローゼンタールという人が言い出しました。

ローゼンタールはフィラデルフィア近郊のある公立小学校である実験をしました。新任の学級担任に向けてこう説明します。——「この検査は、今後数ヶ月の間に成績が伸びてくる学習者を割り

出すために行うものです」と。

しかし本当は検査に何の意味もありません。あとで無作為に選ばれた児童の名簿を学級担任に見せます。その後、学級担任は、名簿にあった子供たちの成績が向上するという期待を込めて、授業を行いました。すると一年後、確かにその子供たちの成績が向上しているではありませんか。

つまり学級担任が子供たちに対して期待のこもった眼差しを投げかけ、子供たちも期待されていることを感じ取ったために、成績が向上したと考えられるのです。

ちなみにピグマリオンとは、ギリシア神話に登場するキプロス島の王です。現実の女性に失望した彼は、理想の女性としてガラテアを彫刻し、それが人間になることを願いました。その願いを神が聞き入れ、生命を与えられて人間になったガラテアをピグマリオンは妻に迎えたという話です。

ロバート・ローゼンタールによる実験方法に対しては批判もあり、別の再実験ではさしたる効果が認められなかったという報告もあります。今ではこんな実験は倫理上から許さず、再実験は困難でしょう。

しかし、深い祈りが病気の治癒に影響することが科学的に証明されているように、強い期待が「隠れた通路」を通して子供に好影響を及ぼすことは十分に考えられます。もちろん、親の過度の期待は子供の負担になるだけでしょうが。

子は親によく似る

私事で恐縮ですが、50歳になる頃から、「お父様によく似てきましたね」と言われるようになりました。1999年に死んだ父とは、顔立ちも体型も声もずいぶん違っていて、親子とは思われなかったのに。

歳をとると似てくるのでしょうか。なで肩の後ろ姿や、歩き方がよく似ていると家人は言います。ちょっとした仕草も、実に似ていると他人から言われるようになりました。あるとき、父を慕っていた人がデスクワークしている背後に立って、何

気なく咳払いをしたところ、その人は飛び上がって驚きました。そして幽霊でも見たようにこちらを見つめたのです。

母親とは、性別が違うこともあって、顔立ち以外にはそれほど似ていると言われません。むしろ神経質なところとか、性格の方が似ているでしょうか。

そうした両親と似ているところは、本人が意外に気づきません。他人から指摘されて「そんなものか」と思うのですが、その気になって自分を観察してみると、似ている点、似てきたところが、あれこれ発見できるものです。

天田愚庵という歌人がいました。正岡子規に大きな影響を与えた人です。幕末に磐城平藩（現在の福島県いわき市）の勘定奉行の子として生まれました。

15歳のときに維新の奥羽戦争に出陣し、戻ってみると薩長軍によって城は落とされ、両親と妹が行方不明です。愛しい家族を捜し求め、彼は各地を歩き回りました。実は落城のときに家族は討たれていたのですが、知るよしもありません。

戊辰戦争の影を引きずりながら、懸命に肉親を捜す一途な姿に、旧幕臣の山岡鉄舟たちが感銘を受けて援助もしました。

その後の人生は波瀾万丈、清水次郎長を助けて富士の裾野を開墾し、見込まれて次郎長の養子にもなるのですが、肉親に会いたい思いは募るばかり。東京に出、大阪に住み、新聞記者や写真師などさまざまな仕事に就きました。でも家族との再会は果たせません。ついに現世では会えないと覚悟した彼は、京都修学院の林丘寺で得度を受け、鉄眼と号する禅僧になります。京都の清水に庵を結んで愚庵と名乗り、万葉調の歌をたくさん詠みました。

写真を見ると、眼光鋭く、精悍な表情の天田愚庵です。しかし実に心根のやさしい人だったことは、肉親への思慕を込めた歌の数々からわかります。

かぞふれば吾も老ひたりははそはの
母の年より四年老ひたり
ちちのみの父に似たりと人が言ひし
我まゆの毛も白くなりనికి
〔「ははそは」は母の、
「ちちのみ」は父の枕詞〕

天田愚庵のような境涯に置かれたなら、少しでも親に似てきたことを知らされると、嬉しくもあり、悲しくもあり、思慕の情はいよいよ深まるはずです。自分の中に両親を見出せるのは、せめてもの救いであつたに違いありません。

親子がよく似るといえるのは、まぎれもない事実です。その事実を前にして、人はどんな反応を示すでしょうか。現代人の多くは「そりゃ、あたりまえだよ。遺伝子を両親から半分ずつ受け継いでいるのだから」といった反応をするのではないのでしょうか。それもまた事実だと科学は教えます。

しかし、その反応に止まっているかぎり、なら発見も発展もありません。似ているという事実から、どのように似ているんだろう、似ていることにどんな意味があるんだろう……と問い詰めていくところに、教育につながる何かが見えてくるでしょう。

遺伝子に関する知識がなくてもかまいません。自分を含むごく身近なところに、観察対象はいくらでもあります。従来の教育界では、その観察が十分ではなかったのではないのでしょうか。「子は親の鏡」とか言われてきたものの、鏡の映り方はまだ十分に研究されていないのではないのでしょうか。

親子の間にある「隠れた通路」

ではこれから、筆者が所属している社会教育団体で提唱してきた「親子相関の原理」を紹介したいと思います。「相関」とありますが、教育論としては、もっぱら親が子に与える影響の大きさを示したものです。

この団体を創始した丸山敏雄（1892～1951）と

いう人は、福岡県内の中学、高校で教鞭を執り、長崎女子師範学校では教頭も務めた経験があります。数多くの生徒やその親たちと触れ合う中で、親子の間には見かけよりもずっと深いつながりがあることを見出しました。

さらに、親子間や家庭内でのトラブル解決の指導体験を積み重ねるうちに、親子の深いつながりについての確信を深め、「親子相関の原理」に関する多くの著述を発表しました。それをベースにした研究をわたしどもはつづけていて、もう70年余の歳月が流れました。平たく言えば「親が変われば子が変わる」というその体験データは、万の数を超えて集められています。

では、「親子相関の原理」とはどのようなものか、ざっと説明しましょう

学校の教師は、受け持ちの生徒の父母にはじめて会ったとき、姓名を聞く必要がないといえます。それは子供そっくりだからです。「似たもの夫婦」とか「他人のそら似」とかもあるでしょうが、世の中に親子ほどよく似ている者はありません。

その親子の似方をよくよく観察してみると、実に細かいことまでもよく似ています。ちよつと見たところ似ていないようでも、静かに仔細に観察すれば、思いも及ばぬところまでそっくりなのに驚くでしょう。

そして相似形的に似ているだけでなく、両者の間には「隠れた通路」が常に開通していて、互いに影響を及ぼし合い、しっかりと結びついていることがわかります。

いろいろな例をあげてみましょう。生まれて間もない乳幼児でも、母親が忙しくてイライラしたりすれば、落ちつきません。両親に心配事があると、安眠できず夜中にグズったりします。小学生ならば、なんだか頭が重くて、学校の勉強がいやになったりします。あるいは親がひどく腹を立てると、子供が鼻血を出したりケガをしたりします。とくに夫婦の間でいさかいやケンカが耐えないと、子供にいろいろ困った問題が起きてくるのは、わかりやすいでしょう。

逆に、親が後始末に気をつけるようにしたら、困っていた幼児のヨダレがぴったりと止まったり、児童の散らかすクセが治ったりします。親が気を引き締めて、張りのある生活態度に切り替えると、子供の怠けグセがなくなり、成績が上がったりします。だいたい夫婦の仲がよいと、子供はおおらかに育っていきます。

とにかく、親が今しているのと同じことを子供がしたり、心に思っていることでさえ、そのまま実演する機会が少なくありません。

親の心をそのまま実演する子供

ある家に、5、6歳の男の子がいました。健康で、しつけもよくできた、明朗で素直な子でした。ある日その子の家に、ステッキをつき、麦わらでつくられたカンカン帽と呼ばれる帽子を被った客が訪れたのです。

その客が応接間で母親と話をしているとき、玄関に出てきた男の子は、突然、立ててあったステッキで客の帽子をつき落とし、さらには土間に落ちた帽子を足でふみにじったのです。そのカンカン帽にはひとたまりもなく穴があけられてしまいました。

男の子が玄関から去ろうとしているちょうどそこに、用談を終わった客が応接間から出てきました。母親はアッと驚いてまっ青になりました。実はその客は、仕事の関係からその家をおびやかす、母親をいじめていたのです。

母親が驚いたのは、その客が今日もふてぶてしくやってきたのを見て、そのカンカン帽をステッキでつき落とし、足で思うぞんぶん踏みにじってやりたい、と思っていたばかりのところだったからです。もちろん親子で相談したわけでもありません。親の心に生じたものが子の心に映され、そのとおりに子が実演してしまったのです。

子育てを振り返ってみて、このような出来事に似た経験はないでしょうか。

この事例は丸山敏雄が集めたかなり昔の一例ですが、中には次のような奇妙な事例もあります。

梅雨明け頃の、九州のある町でのことです。6つ7つぐらいの少女が、いやに葉書を欲しがりました。隠しても見つけ出し、足りないから買ってくれと言います。それでも足りない、厚紙を切って代わりにしました。何をするかというと、何十枚かの葉書を、わざわざバケツに水を汲んできてこれにひたし、濡れたものを一枚ずつ日に乾かす。そして乾くと、いかにもうれしそうにこれを眺めて、どこかにしまうのです。

毎日のようにそんな奇妙な遊びをします。幾日かたってから、母親は何も知らない父親に娘の遊びを告げました。するとどうでしょう、父親の顔はみるみる土色になって震え出したのです。

この父親には、こんな秘め事がありました。川漁が好きだった彼は、梅雨の時期に増水した川で、網にかかったとんでもないものを引き上げました。何とドザエモン、溺死体ではありませんか。

ギョッとして網からはずして捨てようとしたのですが、待てよと思い直し、溺死体が身につけていた財布を抜き取ってから捨てたのです。その夜は一人で二階に上がったまま、「なぜ気味だから火鉢をくれ」と妻に命じ、炭火をおこさせました。そして、札入れの中から取り出した札束を一枚一枚はいで、火鉢のふちに並べます。一晩かけて全部を乾かし終え、奥にしまいこんだのでした。親の秘め事を露わに示している娘の奇行を知った父親は、驚きのあまり、すっかり体調を崩してしまったそうです。

隔たりを超えて感応する親子

親子が似たことをしたり、親の心意を実演してみせるのは、親子の居場所が遠く離れていても起こることがあります。

ある父親が東京の本社から、新潟の工場に出向を命じられ、単身赴任しました。最初は張り切っていたものの、だんだん居心地が悪くなって、仕事をさぼるようになってきました。すると、東京の自宅にいる小学3年生の息子が、急に学校に行きたくないと言い出し、母親を困らせたとか。

まるで発電機と電灯のように、親子の間には電流が通じ合っているようです。

もちろん親の行動や心の持ち方のすべてが、子供に投影するわけではありません。しかしそうした感応現象は実際に起こるので、そこには何らかの意味がありそうなのです。子供の普通ではない行動が、両親に何かメッセージを伝えているのではないのでしょうか。

さらに親子の間には、不思議な深いつながりがあります。

それは、子供が乳幼児から大きくなる過程で、両親の発育過程で起きたと同じようなことを繰り返す現象があるということです。自分の親が近くにいたら、時々こんなことを言われるのではないのでしょうか。

「この子(孫)はあんたとそっくり。よく夜泣きをしてね。何度外に出て、抱いて歩いたか知れませんかよ、寒い夜にね……」とか、「よくおねしょしてね……」とか、「あんたもちようどおなじ頃に高い熱を出して、ハラハラしたものよ」とか。

このように、長い時間を隔てて似たことをくりかえす投影も少なくありません。その現象は、子供がかなり大きくなり、成人してからも時に起きるものです。そこには、親子の間だけでなく、祖父母やさらに上の祖先からの繰り返しが含まれている可能性もあります。

親子投影のさまざまなパターン

そうした親子の深いつながりを示すいくつかのパターンを、「投影」という言葉を使って整理してみましょう。親というプロジェクターから発する光が、子供というスクリーン上に影としての映像を結ぶわけです。

その場合の投影には、子が親のしぐさを目の前に見ていて真似るとか、親がその意志を子供に通じさせる合図をすとか、目に見える因果関係は認められません。「隠れた通路」を光が通って、影の像を結ぶという投影です。

[現前投影]

現在の親の心に思ったことや行為が、身近にいるわが子に投影し、子がこれを実演する。

[超時間投影①]

上記のことが、一定の時間を隔てて起こる。数時間、数日間、あるいは数ヵ月間といった長い時間を隔てる場合もある。

[超時間投影②]

親がわが子の年齢の頃に行ったと同じようなことを、子供がやり出す。

[世代投影]

上記の投影が祖父母の代までさかのぼって認められる場合（祖父母 → 両親 → 子供）。

[超世代投影]

世代投影が、父母を飛びこえて孫に及ぶ場合。それが数代を隔てて起こる場合もある。

[超空間投影]

親の心に思ったことや行為が、空間を隔てた遠い別の場所にいるわが子に投影し、子がこれを実演する。

このようなさまざまな投影現象を、親と子のつながりの軸において認めたり、予想することができます。時間や空間を超えた（隔てた）投影については、にわかに信じられないかもしれませんが、そうとしか思えない出来事が現実起こるのです。

親が（場合によっては祖父母が）心や行いを変えたとき、子供に投影されていた現象が消えたり変わったとしたら、その深いつながりを認めざるをえなくなるでしょう。

超世代投影になるとなかなかわかりにくく、実証は難しいのですが、親や祖父母の精神的な要因が子に投影するというのは、「精神的遺伝」とも言えるでしょう。今後、遺伝子の暗号が精緻に解明されていったら、そういうこともわかってくるかもしれません。

親子体験の実例

ではここで、わたしどもの研究所に報告されて

いる親子体験の中から、一つだけ事例を紹介しましょう。自分が変われば家庭が変わる、という具体例です。

平成2年に社内で知り合った夫と恋愛結婚したOさんは、新婚旅行のときから夫に不審を抱きました。少しも自分に気を遣ってくれないからです。しかし翌年に長男を授かり、6年後には長女も誕生し、毎日が忙しく過ぎていきました。

パートでも明るく振る舞い、近所の人たちとも仲よく付き合ってきた彼女ですが、家に帰ると無性にイライラします。夫は自分を認めてくれず、思いやりがない。子供たちは言うことをきかず、可愛げがない……。〈なんで私だけこんな大変な思いをするんだろう〉と心の中は不満でいっぱいでした。

夫と顔を合わせればケンカばかり。「勝手にしろ！」と怒鳴られては、夫を責めていました。長男は長男で学校の物を壊したり、友達とケンカをして帰ってきます。長女も「気が強すぎて困る」と学校で注意を受けます。そのたびに〈私はこんなに一所懸命やっているのに、なんで人に迷惑をかけるの！〉と、子供を責めていました。

相談を受けて気持ちを切り替え、良い妻良い母になろうと努力するのですが、なかなか心までは変えられません。いつもなにか引っかかるものが心に残っていました。

平成12年のある日、わたしどもの講演会を聴講したOさんは、「親の愛に触れる。こだわりを捨てる」という内容に心打たれ、子供の頃のことを思い出していました。高校を卒業すると同時に家を飛び出し、そのまま実家に戻ることなく結婚し、ずっと親を憎み怨んできた自分に、改めて気づいたそうです。

父親はOさんが物心つくころには、外で浴びるほど酒を飲み、家に帰ってくれば大暴れしていました。母親も気の強い人だったので、そんな父に向かっていき、大げんかになります。やがて母親も夕食の支度をしながら酒を飲むようになり、食事を作り終わる頃にはそのまま寝てしまいます。

怒った父親から殴られた母親の顔は、外に出られないほど腫れ上がっていました。

〈私の家は普通じゃない、学校ではみんなと同じようにしなくちゃ〉と思うOさんは、いつもビクビクして、人の目ばかりを気にする子供になっていました。

それでも中学校から剣道に打ち込んだため、自分に自信が持てるようになり、高校に進む頃になると、両親の間は少し落ち着いてきました。しかし高校を卒業するや、母の「勝手にしなさい」という言葉に見送られて家を出たのです。

自分の親を再発見する

講演を聴きながら、静かに目をとじると、ケンカしている父母の姿や、思い出しくない状況ばかり浮かんできます。「こだわりを捨て、うれしかったことを思い出し、感謝の心を深めてください」という講師の言葉に導かれつつ、改めて両親の顔を思い浮かべました。あんなに静かな気持ちで両親のことを思うのは初めてだったそうです。

すると、それまで気づかなかった両親の姿が、まぶたに浮かぶようになりました。剣道の朝練で出かける自分のために、毎朝、お弁当と朝食を作ってくれた母。いつも働いてばかりで、家でゆっくりしているところを見たことがなかった父。楽ではない生活の中で、自分たち4人の子供を育ててくれた両親……。

考えてみれば、父親が酒を飲んで暴れたのは一時期のこと。母親が台所で寝てしまったことなど、わずか数回にすぎません。仕事や人間関係のストレスをお酒で紛らわせるしかなかったことも痛いほどわかってきました。Oさんは、両親が大事に育ててくれたことや愛情をかけてくれたことを忘れ、ほんの少しの嫌な思い出にずっとこだわっていたのです。

気がついたら講師の話は終わっていました。長い間こわばっていた肩の力がふと抜けたように感じました。

その後、実家へ帰った折にOさんは、「お母さ

んの気持ちもわからずに今まで迷惑ばかりかけてごめんなさい」と詫言いました。そしてこれからは両親が元気で暮らしてくれることを願いながら、両親に喜んでもらえることを実践しようと決心しました。

そして実家で、洗濯物を干す母親を手伝っていると、洗濯物の干し方が自分と違うのに気づきました。母親は早く乾くよう工夫して干しているのです。そのとき、ハッとしました。これまで一度も、家の手伝いをしたことがなかった自分だったことに。さらに、子供の頃から思い通りにならないと、何でも他人のせいにしてきた歪んだ性格にも、ようやく気づいたそうです。

以来、両親がときどき家に遊びに来てくれるようになりました。夫婦の絆も深めることができ、子供たちの態度もすっかり変わっても親を喜ばせるようになったそうです。

親子投影の意味

このOさんの体験は弊研究所の月刊誌『新世』にも掲載されましたが、類似の報告はこれまで数多く寄せられています。

親子関係でいえば、「親が変われば子が変わる」という体験になります。そして、親であり妻である自分が変わったのは、「親の子」でもある自分が、両親へのこだわりやしこりを捨て、関係改善を果たしたことによる、というのがこの体験のポイントです。

岡目八目という言葉があるように、人は意外に自分自身のことを知りません。気づいていない心の歪みや、こだわりや、クセや、習慣がどれほどあるでしょうか。そうしたものが子供に投影されるのです。

親子の投影現象で興味深いのは、それが起こることの意味です。さきほども申し上げたように、子供の普通ではない行動、親を困らせるような態度が、両親に何らかのメッセージを伝えているのではないのでしょうか。

そのメッセージを正しく受けとめて、親自身が

変わったら、子供の状態も変わり、親子関係は驚くほど好転します。親子は「隠れた通路」を介してしっかりつながっているのですから。

心が変われば肉体（病状）も変わることは、心身医学の発達によって明らかになりました。親が変われば子が変わるのも日常的な事実です。それを敷衍すれば、自分が変われば相手が変わる、自分が変われば境遇が変わる、ということになります。そうした事実をさらに推せば、人間関係の背後に「見えざるつながりのフィールド」があるのではないかと予測できます。現実世界の背後に、すべてを統合している「一」なる次元があるのではないかと思われまます。

実は近年の物理学の世界で、そういうフィールドや次元を想定する学説が出ています。アインシュタインの共同研究者でもあったイギリスの理論物理学者デイヴィッド・ボームは「量子ポテンシャルQ」というパイロット波が、宇宙の観測不可能な深い領域から現れて、物理学者が観測しているような量子の振る舞いを導いているという理論をつくりあげました。

ボームの先輩筋の物理学者エルヴィン・シュレディンガーは、「個人の自己意識は他人のそれと、また高次のレベルで形成される宇宙的自己と同一のものである」と言いました。哲学者・未来学者でピアニストでもあるアーヴィン・ラズローは、現実の存在の根源には、相互結合し、あらゆる情報を保存し伝達する宇宙場（コズミック・フィールド）が存在するとして「Aフィールド」（アカシック・フィールドの略）と名づけました。

万物が見えざる「一」なる次元でつながっているとしたら、人間関係でもとくに親子や夫婦は、濃い密度で結びついているのでしょう。

シュタイナー教育が提起する「地下の通路」

ドイツの神秘思想家でシュタイナー教育の提唱者でもあるルドルフ・シュタイナーの研究者として名高い高橋巖氏によると、シュタイナー教育には処方箋がなく、先生と生徒が互いに向き合った

ときに、すでに教育の本質の90パーセント以上が現れている、という考え方に立つのだそうです。

どういうことかといえば、先生と生徒（もちろん親と子）の間には見えない「地下の通路」のようなもので結びついています。アースが地下に電気を流すように、目に見えない地下の通路を通して先生の思いが生徒の中に伝わるとか、生徒たちの気持ちが先生の中に伝わります。そこには言葉を超えた心の結びつきがあるのです。

テレパシーという超心理学の用語になりますが、日本語に言い換えると「以心伝心」でしょう。教育にとって基本的に重要なのは、そのテレパシーなのです。もちろん大人よりも、感性を全開にしている子供の方が、はるかにテレパシー能力は高い。子供はみんな超能力者と言っていいかもしれません。

高橋氏は『自己教育の処方箋』の中で、あるシュタイナー系の養護学校を見学したときのことを書いておられます。それは、小学校5年生のクラスでギリシア語を教えていた場面です。なんとそこでは、ギリシア語でホメロスの朗唱をし、その詩句の意味を講師が一生懸命講義していました。

聴いているのは障害を持つ子供たちです。脳性麻痺の子もいれば、四階の窓から下を通る人の頭に生卵をぶつける特技のある子もいました。わずか7、8人のクラスでもいろいろな子がいるのですが、すごく高度な、大人が聞いても非常に興味深い古代ギリシアについての講義をやっていました。

そして不思議なことに、子供たちがそれを懸命に聞いています。隣にいた生卵をぶつける子や車椅子の子供が、見学している高橋氏に「わかるか」「ノートを見せてあげよう」と言ってくれたりしたそうです。以下は高橋氏の言葉です。

後でその先生が言うには、養護学校であればあるほど、レベルの高い講義をしたい、そうすればその講義の内容が子どもの無意識の中に流れ込んで治癒的な力に変わると思う、と

いうのです。子どもたちがわかっているかわかっていないかはぜんぜん問わないんだそうです。意識のレベルで受けとっているときには、難しいか難しくないかの問題になるのですが、子どもの無意識のレベルで受けとっているときには、難しいか難しくないかの問題になるのですが、たとえ意識していなくても、ちゃんとわかっている、というのです。そして「自分はリプロダクションを問題にしない」とも言っていました。

驚くべき授業ではありませんか。リプロダクションとは「再生産」ということです。教えたことを子供が紙に再生産するかしないか、つまり言われたとおりに正確に表現できるかどうかはまったく気にしない、という教師の態度なのです。

なぜなら、リプロダクションを教師が気にし出したら、子供たちに不安を与えます。気にしなければ、子供は安心して忘れられる。子供の記憶には、先生が夢中になって熱弁をふるっていたらしい、ということがかすかに残ればいいというのです。

なぜなら教師たちは、周到に準備をして、子供がわかるわからないはお構いなしに、子どもの中の「聖なる部分」に向かって講義するからです。しかも、子供たちはちゃんと聞いていた。こういうところに、「地下の通路」を前提にしたシュタイナー教育の独特なところがあるのです。

授かり預かる子供

では最後にもう一度、わたしどもが提唱している「親子相関の原理」に基づいた家庭教育論の骨子をお伝えしたいと思います。

まずはじめのポイントは、子供の本質です。受精にしても、出産にしても、まことに不思議きわまりない営みです。受精や出産のメカニズムについては、医学や生物学で解明されている通りです。しかしそこでは事実を説明してくれても、受精や出産の不思議さについては何も教えてくれません。

古代の日本人は、子供の誕生を含む万物の生成を「むすび（産霊）」と呼びました。結ばれた男女両性の合一は、生成の力と化して、別の新しい生命を誕生させます。その神秘に満ちた不思議さを「むすび」と呼んだのです。

生まれ出た子供は、親自身の生命の延長として、祖先より連綿と続いてきた生命のバトンリレーを継承していきます。しかし、子供が欲しくてならないのに、子宝に恵まれない夫婦も少なくありません。逆にもう子供はいらないと思っけていても、夫婦生活を営んでいれば、生命を授かる機会が与えられます。

だから、子供は「授かりもの」と言うほかありません。子供を「つくった」とか「つくらない」などとよく口にするのは、すでに生命への畏敬の気持ちが失われている証拠でしょう。

生まれ出た子供は「授かりもの」であると同時に、「預かりもの」でもあります。

一人の人間の生命が母胎に宿り、十月十日を経て生まれ、成長してやがて自立できるまで、両親のもとに預けられている。親には、預からせていただいている責任があります。

したがって子供を「わがもの」と思い込み、自分の所有物であるかのように振る舞い、親の勝手に育てようとするのは、明らかに誤りです。このような錯誤に、親子間のトラブルや苦しみが根ざしていることを、わたしたちはもっと強く認識すべきでしょう。

子供を一人前にまで育て上げるのは、並大抵の苦勞ではありません。相当な手間も、時間も、お金もかかります。病気になれば心配し、反抗されれば悩み苦しむ。〈子供って、なんて厄介な〉と放り出したくなるのも、一度や二度ではありません。

ところが反面、子供はまことに貴い存在です。何一つ自分のことをできない赤ちゃんですら、大きな役割を担っています。時には親を教えたり、導いたり、報酬をどっさり与えてくれることもあります。

親にとって子供とは

ではここで、子供は親にとってどんな存在なのかを整理してみましょう。

第一に、子供は愛情を傾ける相手だということ。これは申すまでもありません。人は食べ物がなくは肉体を維持できないように、心にも栄養が必要です。とくに愛は、完全食のような心の栄養源でしょう。

愛なくして人は生きられません。愛情は受けるのも喜びであれば、与えるのも喜びです。愛を注ぐ相手がいれば、生きがいや張り合いが生まれます。

愛情とは不思議に、与えないでいると、涸れたり腐ったりする。子供は親にとって、かけがえない愛情の相手です。

新婚の熱も冷めかかった頃、わが子という愛護の相手が与えられると、途端に、夫婦の親愛は高まり、家庭は明るく輝いて、歓喜の交響曲が流れはじめます。

自分の生命を賭けても育てよう、守り抜こうとする相手を授かったのは、何と有り難いことか。感謝の思いは尽きません。

そして子供は、家庭の和楽の中心となり、周囲を明るくしてくれます。とくに赤ちゃんは、ぼっちょりして、ツルツルしていて、機嫌がよければよく笑い、なんとも愛くるしい。憂いを知らない、純粹無垢な幼な子の姿を見るだけで、大人の心は和み、やさしさと潤いを取り戻します。

親夫婦がいざかいを起こしているときなど、子供がよく間をとりもってくれるものです。だから「子はカスガイ」と言われてきました。カスガイとは、建材の合わせ目をつなぐために打ち込む金具のことです。夫婦をつなぎとめる役割を、子供は見事に果たしてくれます。

さらに子供をよく観察してみると、さきほど述べたような親子のいろいろな投影現象を見出せるでしょう。まさに子は「親の鏡」です。両親の心や行いが、今だけでなく、時間も空間も超えて映

ります。その鏡は、見まいと思っても見ないわけにいきません。子供という鏡を通して、親は自分を振り返り、自己教育ができるわけです。

そしてもう一つ、一般にほとんど認識されていない子供の役割があります。それは、「親の身代り」を演じてくれるということです。

人としての道にはずれた行為を繰り返したり、自己中心に歪んだ心が集積することをツミと呼んでおきましょう。両親あるいは祖先にそのツミがあるとき、子供がしばしばそれを身に引き受け、親祖先の身代りとなって苦しんでくれるのです。それは病気や身体の異変として現れたり、異常な行動や頑固なクセとなって現れます。

どうして身代わりということがわかるかといえ、それに気づいた親が深い自覚と反省のもとに、ツミを改めるよう努めるとき、子供の異変や異常が改善されていくからです。

やはり親子は「隠れた通路」を介して、しっかりつながっている。病身な子、手のかかる子ほど、実は親孝行者といえるのではないのでしょうか。

「過ぎる」行為が子供を弱くする

親子の間の「隠れた通路」を意識したとき、子育てのあり方が変わってくるでしょう。基本的なしつけはもちろん施さなければなりません。子供に模倣されるにふさわしいモデルであろうと努めるのも大事です。そしてとくに、子供にマイナスの投影をしないよう努めることです。投影に気づいたならば、すぐに自分自身を改めていくことが肝心。

ですから、子供に対して喧しくあれこれと手出し口出しするような教育的態度は控えた方がいい。子供の発達に応じた厳しいしつけも、愛護に裏打ちされていないければ逆効果になるだけです。

もちろん、わが子に家業を継がせたい場合、とくに芸道の家柄などでは、幼児のうちから厳しくたたき込む教育が必要とされるでしょう。はっきりした信念と目的意識のもとに、子供に教育することはあります。その場合でも、「隠れた通路」を

意識した感化や薫化の教育、そして親子の投影現象をよくよく配慮すべきです。

近年ではわが子に愛情を抱けない親が増えていくと聞きます。実際にどのくらいの数で増えているのか詳細は知りませんが、子供に対する親の愛情の発揮にも、いろいろなケースがあります。

常に深い愛情を注いで子供に向き合える聖人のような親など、ほとんどいません。「可愛さ余って憎さ百倍」というように、愛と憎の両極の間を親の心は揺れ動くものです。愛情の欠乏も困りますが、愛情過多もまた大きな問題です。

愛があまりに大きくて、子供を「わが子」と思う意識が強すぎると、エゴの愛と化してしまう。すると子供にいろいろな問題が生じてくる。子育ての難しさがここにあるのです。

愛情が強いと過干渉となりがちです。手出し口出しをし過ぎる、可愛がり過ぎる、気かけ過ぎる、食べさせ過ぎる、着せ過ぎる、お金をやり過ぎる……。すべて「過ぎる」ことが愛児を縛りつけ、軟弱な子供にしてしまいます。両親だけでなく、祖父母によっても、「過ぎた愛」の犠牲となっている子供は少なくありません。

また複数の子供を持つ場合に、陥りやすいのが偏愛です。自分と子供との相性というものもあって、知らず知らずのうちに偏愛していることに親はなかなか気がつきません。偏愛された子も、されない子も、どちらも性格的な歪みやひずみを持つようになってしまいます。近所の他人の子には目もくれず、自分の子どもばかりを溺愛するのも「偏愛」の一種といえましょう。

そこでわたしどもが子育ての秘訣として提唱しているのが「捨てる」です。

妙な言い方に聞こえるでしょうが、愛育の放棄とか放任主義という意味ではもちろんありません。親が「過ぎる」行為を戒め、とくに過剰な心配や不安をサラリと捨てて、子供をできるかぎり自然状態に置いてやることです。

もちろん、与えるべきものは惜しみなく与え、禁ずべきことは断固として禁じなければなりません。

その上で、ことさらな干渉はせず、子供の伸びようとする力をそのままに伸ばしはぐくむ養育を「捨てる」と呼ぶのです。胎児を身籠もったときから「捨てる」は始まります。

家庭は親にとって、切実な自己教育の場にほかなりません。子供との間の「隠れた通路」を意識することで、親の自己教育力はいよいよ高まるでしょう。そこから、家庭教育の再生が始まります。

「捨てる」をバックアップするのは、何よりも、夫婦が信愛に満ちて子供を包んでいる空気です。それこそが薫化の教育のポイントであることを、最後に強調しておきたいと思います。

※本稿は『美しき日本の家庭教育』（致知出版社、2008）の一部に加筆補正したものです。